様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：１４７０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１７４４６

研究課題名（和文）大学におけるピア・サポート活動がもつキャリア形成を支援する機能に関する研究

研究課題名（英文）research on effects of peer-support activities to create and develop their career at higher education

研究代表者
宮橋　小百合（Miyahashi, Sayuri）

和歌山大学・教育学部・准教授

研究者番号：８０４６１３７５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，卒業生へのインタビュー調査からピア・リーダー経験とキャリア形成の関係について考察し，以下の3点が示された。（1）経験を現在の職業状況に当てはめ，意義づけており，ピア・リーダー活動の知識やスキルを現在の職場で活用していること，リーダーシップについての考え方を自らの職場でのマネジメントに活用していること，（2）ピア・リーダー仲間と，現在でも関係を維持していること，（3）彼らはピア・サポート活動を通してキャリアレジリエンスが育成されていた可能性の3点である。全員から「周囲からの支援」が語られ，キャリア形成における「周囲からの支援」の重要性を経験的に学習していることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では,ピア・リーダー経験のある卒業生を対象としてインタビュー調査を実施し,大学教育カリキュラムの成果を示している点において,大学教育の充実に資するという社会的な意義を持つ。また,これまではピア・サポート活動そのものをキャリア教育として行っている実践研究,ピア・サポートを受けた学生やサポートした学生のキャリア形成に関する実践研究等は行われてきたが,卒業後5年以上を経過した卒業生を対象として,そのキャリア形成への影響をどう感じているのかについて調査した研究は独自性があり,今後ピア・サポート活動を大学教育においてどのように位置づけるのかという視点を提供したという意味で、学術的意義がある。

研究成果の概要（英文）：In order to research on effects of Peer Leadership activities at higher education, this study interviewed the 5 graduates which experienced peer-leaders at a university.The results of these investigations showed that they regarded the Peer Leadership experiences as the significance for their career. Some of them used the specific knowledge and skills of the experiences in their work environments, another who was a teacher at elementary school, applied the views of leadership learned by peer-leader's lessons to his classroom. And they had kept their friendships among ex-peer-leaders, but they didn't tell a lot about their juniors who were supported by them at a university. In addition, they might develop their career resilience by support activities at a university, because all of them told that they were supported by those around one in their work environments, and they empirically understood those supports they accepted might help them to develop their career.

研究分野：大学教育

キーワード：ピア・サポート活動　キャリア教育　大学教育　卒業生調査

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

多くの大学において，初年次教育カリキュラムや学生支援の一環として学生による授業補助やピア・サポート活動の取り組みが実施されるようになり，「学生との協働」はもはや大学教育の重要なテーマとして認識されている（杉谷, 2018）。学生によるピア･サポーターや SA（Student Assistant）の役割は多岐にわたり,個人のメンター，組織やコミュニティのリーダー等の役割に加えて, ロールモデル, パーソナルサポート機能, 助言･紹介機能, 学問的成功や学習のコーチ, そして大学での成功や人生のコーチを含んでおり，具体的には，高校から大学への移行，大学への満足度, 学習パフォーマンス, 学生生活の継続等にも肯定的に影響しうることを先行研究は示している(Shook & Keup，2012)。

また,サポートを受ける側だけでなく,サポートを提供するピア・リーダーや SA 側にも何らかの学習が生じていることもわかってきた。ピア・リーダーたちは,サポート活動を実施するための養成講座や研修,活動に伴う教員や職員との打ち合わせ,サポート活動の計画・実行・評価による気づきを，大学での学習内容とつなげて知識の再構築を行い,またそれらの知識をサークル活動やアルバイト等の正課外の活動ともつなげてスキルの活用場面を見出しているという事例研究もある(宮橋,2014)。また，SA 制度を実施することで SA が単なる教員の補助の役割にとどまらず，責任感や主体性・積極性などの社会性を向上させ，大学への帰属意識や連帯感の伸長をもたらしているという事例研究なども行われている（新井・小濵・中條，2017）これらはまさに，人間関係形成・社会形成能力や自己理解・自己管理能力に含まれており，課題対応能力，キャリアプランニング能力とともに，キャリア教育において求められる「基礎的・汎用的能力」であると言える（中教審，2011）。

さらに,「学生との協働」によって大学を基盤とする関係性のネットワークが構築されることは,サポートを提供する側･受ける側双方にとって,大学コミュニティへの参加を促し,そこで得られた社会関係資本は大学生活を安心して過ごすための資源となりうる。例えば，杉田(2015)は学校（高等学校）が「他者と時間や場を共有することを通じて埋め込まれる関係をつくりだす，いわば『所与性』をつくりだす機能」を持つことに着目し，そこで構築される関係性が,「その後の人生を生きていくための社会関係資本を得る意味で重要な意味をもつ」と指摘しているが,そのような機能が，ピア・サポート活動によって大学を基盤とする関係性のネットワークにもあるのではないかと考えられる。

２．研究の目的

上述のような問題意識から，大学内での関係性構築を促進し,「所与性」をつくりだす機能をより活性化する取組みとして，ピア・サポート活動に注目するとき，そこに学生のキャリア形成を支援する側面もあるのではないかと考えた。そこで本研究では，ピア・サポート活動に従事していた卒業生が，ピア・サポート活動によって得た知識やスキルを，当時を振り返ってどのように評価し，その後のキャリアとそれらの知識・スキルがどのようにつながると考えているのかについて検討することで，キャリア形成の支援という観点からピア・サポート活動の意義を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

ピア・リーダーの経験を，現在ではどのように解釈しているかについて詳細に聞き取るためには，半構造化インタビュー調査が適していると考え，ある地方私立大学でピア・リーダー経験のある 6 名の卒業者に調査協力を依頼した。吉本（2007）の研究で,「対象年度コーホートの決定」については,「卒業後 10 年以内で選択するのが適切」であるという指摘に基づき，卒業後 5～7 年の元学生を対象とした。全員 2012 年度（2013 年 3 月）に大学を卒業しており，現在就業している（表 1)。調査協力者は著者の知人であり，ピア・リーダー時代に養成講座と初年次教育カリキュラムでの活動等について協働した経験があった。2012 年度卒業生でピア・リーダーとして活動した 10 名のうち，事前に協力の承諾が得られた 5 名を対象とし，居住・就業地域が大学のあった県内か県外かに偏らないようにした。著者との信頼関係に基づいた聞き取りが可能であることを優先したため，調査実施時期に 3 年の幅が出た。

表１　調査協力者の属性

		年齢*	調査日	居住地域	職業	転職経験	ピア経験
A	男	27	2017 年 10 月 7 日	県外	公務員（教員）	無	3 年
B	女	28	2018 年 6 月 30 日	県外	公務員（教員）	無	3 年
C	男	29	2018 年 9 月 16 日	県外	公務員（教員）	無	3 年
D	男	29	2019 年 6 月 12 日	県内	会社員（福祉）	有	3 年
E	男	29	2019 年 7 月 20 日	県内	公務員（事務）	無	3 年

インタビュー調査では，質問①仕事の内容と経歴，質問②ピアの経験が今に役立っているか（活きているか)，質問③人間関係の広がり，質問④ピア・リーダーをやってよかったこと，の 4 点について話の流れにそって質問し，その内容を聞き取った。それぞれ 70～90 分程度聞き取りを実施した。

インタビュー調査は実施前に著者の所属機関の倫理審査を経ており，個人情報の保護を徹底し，本研究の目的以外には使用しないことを協力者には承諾してもらった。インタビューの内容は，協力者の許可を得てからICレコーダーで録音し，すべて文字に起こした。意味のまとまりに基づく文書テキストの切り抜きとコーディング，コードの類似性に基づくカテゴリー化，全体の解釈という手順で質的データ分析を進めた（佐藤，2008）。

個人を特定されないため，聞き取りの中で出てきた人名はすべてアルファベットで置き換えた。上述の質問①から質問④についての文書テキストを，キャリア観や仕事観に関わる語りとピア・リーダーでの経験や仲間とのつながりに関わる語りを切り抜き，佐藤（2008）の手順に従い質的分析ソフト（MAXQDA）を使用してコーディングした。その結果，〔ピアとのつながり〕，〔大学教員とのつながり〕，〔ピアでの経験〕，〔周囲からの支援〕，〔子ども・入所者のために〕，〔仕事楽しい・やりがい〕，〔挑戦したい〕，〔成長〕，〔専門性〕，〔忙しい〕，〔苦手・嫌い〕，〔大変な同僚との関係〕の12のカテゴリーが抽出された。

４．研究成果

(1)ピア・リーダーの経験についての語り：〔ピアでの経験〕カテゴリーから

質問②と質問④に関して，協力者たちからはピア・リーダーとして養成講座で学習した内容や経験から学んだことを，現在の職業での状況に当てはめた語りが見られた（表 2）。Aは，自分が担任する学級でのやり取りとして，学級で育てている植物についた害虫をどうするか話し合ったときに，普段は大人しい男子児童が活躍したことで，その植物の世話についてその子が学級で中心になったというエピソードを語ってくれた。その後，質問②にかかわって，「なんかその子のやりたいこと，一緒にやろうぜとかっていうの，僕がたぶんできることだと思うのでって，そのリーダーシップ，いろんなリーダーシップが（学級内に）あっていいんだなって思う。」と語った（表2）。

C は，「ピアとして，やっぱり学生と教授との間に立ってやるからこそ，いろいろ真ん中で仲介役で先生に伝えづらいこともあったりしたときも，ちらっと聞いたりしたときもあったかな。」と，学生と教授との間に立つ「仲介役」のような立場の経験が，現在の職場でも「役立っている」と語っている。この「仲介役」のような立場は，後述する〔大変な同僚との関係〕に関する語りの中にも見られた。

またDは，「ピア・リーダーをやった経験が生きているか」という質問②に対して，「それはどうかあれですけど…」と答えつつ，入所者の認知症の方への対応について語り始め，「一人一人ちょっと違うんで。対応とかも。」と語っている。この語りに対して著者が「それも，ピアで言うたら『1年生，一人ひとり違うし』ということ？」と尋ねると「そんな感じです，今思えばそうですね。」と答えた。

表２　〔ピアでの経験〕カテゴリーの語りの例

	ピアでの経験
A	●（ピア・リーダーの養成講座で）なんかリーダーシップって引っ張るだけじゃないんだよっていうのが。いろんなリーダーシップがあるよっていうのは，X 先生の言葉聞いて「なるほど」と思ったし，その後もピア・リーダーのいろんな場面で，ああこの人は支える力がすごくあるとか考えると，なんか楽になるじゃないですけど，みんながみんなそれぞれでいいんだと思って。 ●なんかその子のやりたいこと，一緒にやろうぜとかっていうの，僕がたぶんできることだと思うのでって，そのリーダーシップ，いろんなリーダーシップが（学級内に）あっていいんだなって思う。
B	●この感じのキャラになったのは大学のときなので，それは大きいなって思いますね。これがとかじゃなくって，全般的に。いろんな人としゃべるようになったりとか，ちょっと心が強くなった。
C	●あんまり積極的に自分からいくってことがそこまでなかったので，結構これから教員になるのに，そんなんでええがかなとかって思いよったときに，そのピア・リーダーの募集があった。 ●例えばいろんな人と関わるってことが，やっぱり一番そこでやりたいなというのを関わらなきゃいかんなと自分でも思うちょったので，そこで自分から関わるってことも身に付いたかなと思うし，
D	●(認知症の人も)一人一人ちょっと違うんで。対応とかも。 ●元々は人前であんまりしゃべるのが苦手でもあって，それを克服するためのそういったアイスブレイクとかを自分なりに考えて，朝の朝礼の時にちょっと発表というか，ちょっとやってるんですけども。1年間，継続で。
E	●ピアでは学部や関係ない，学年も違う子らと懐入るうまさに磨き掛けてくれたんは間違いなくピア。 ●学部とか学科も違う子たちとどうやって最初のコミュニケーション取っていくかっていうのから入って，下の子たちをどうやったら相談してもらいやすい雰囲気とか，雰囲気作りだったりとか，対人のコミュニケーションというところが磨かれたんちゃうんかな。

（）内は著者による解説や補足

ピア・リーダーとして１年生同士の関係づくりのスキルとして行っていたアイスブレイクを，現在の職場でも活用しているという語りがA，C，Dへの聞き取りから見られた。Dが「20代が2人，僕ともう１人のその子しかいないって感じで，あと全員が30，40，50ぐらい。」の年齢構成の福祉の現場でアイスブレイクを行っているという語りは著者には想定外だった。Dは「元々は人前であんまりしゃべるのが苦手でもあって，それを克服するためのそういったアイスブレイ

クとかを自分なりに考えて，朝の朝礼の時にちょっと発表というか，ちょっとやってるんですけども。」と語っている（表 2）。大学時代のピア・サポート活動として習得したスキルを活用して，職場での関係づくりのために努力している D の様子がうかがえる語りであった。

(2)大学時代の人間関係についての語り：〔ピアとのつながり〕と〔大学教員とのつながり〕

ピア・リーダーとして活動していた当時の人間関係が，杉田（2015)のいうような「その後の人生を生きていくための社会関係資本を得る」ような活動だったのかを明らかにするため，当時を振り返りながら大学内での人間関係が広がったかや，現在でも人間関係が維持できているのかについて尋ねた。協力者全員からピア・リーダー仲間との関係性が，少人数であっても維持されていることが語られたが，サポート活動の対象だった下級生との関係性についての語りはあまり見られなかった。これは，著者と調査協力者たちが共有している関係性にピア・リーダー仲間が多かったため，語りが偏っている可能性が否定できない。しかし，ピア・リーダー同士の人間関係は，多くの人とつながっているというよりは，少人数で現在でも続いていることが語りからは明らかになった。A と B も，居住地が離れているので直接会う機会は限られているが，現在も電話でやりとりしながら関係性を維持していると互いに語ってくれた。例えば C は，「E 君はすごい地元に来るんです。何回もうちに泊めて，いろいろ車で回ったり，あとは年 1 で旅行に。」と語り，調査協力者の E とのつながりを語った。E にとっても「毎年，実家には遊びに行きよんですよ。あそこ（C の）お父さんとお母さん，いつでも泊まりに来い言うてくれる」と C の実家に泊まりに行くことを楽しみしており，加えて年 1 回 C と旅行に行くことが非常に楽しいと語ってくれた。

また，当時の大学教員との関係性についての語りがいくつか見られた。A はピア・リーダーで関わった大学教員の紹介で行った学校支援バイトの経験が，その後の子ども観に影響していると語り，「ピア・リーダーやってたからたぶん紹介してもらった」と教員との関係性について分析している。大学のある県内に住む D は，ピア・リーダーで関わった大学教員の授業の一部を，OB ボランティアとして現在でも手伝っていると語ってくれた。

(3)職場での人間関係についての語り：〔周囲からの支援〕と〔大変な同僚との関係〕

調査協力者全員の語りから，周囲の人からの支援を受けているおかげで，現在の職業や仕事がうまくいっている，あるいは何とかやれているという語りが得られた（表 3）。キャリア年数から主任などになっている協力者が多く，ピア・リーダーというサポート活動に従事する側であった経験を生かして，周囲の人を支援する側の話が多く聞けるのではないかという著者の想定は外れ，そういった語りはほとんどなかった。主任という役割としてリードする経験は語られたが，周囲との関係性についての語りの多くは，「いかに助けられたか」というものであった。これらの語りから，彼らが仕事をやっていく上で周囲の人に助けられることの重要性に気づいており，周囲とうまく人間関係を築いていきながら，その助けを得ていることが分かる。A も E もその語りからは，高校や大学時代から周囲に助けられてきたとも語っており，経験的にその重要性を学習してきているようである。

表 3　〔周囲からの支援〕カテゴリーの語りの例

	周囲からの支援
A	●（ベテランの先生に）「あなたのためを思って言ってるのよ」みたいな。怖って。「はい」って。「すいません」とか。（中略）その先生いたから，だらけずに（怠けずに）これたなとは思います，すごく。 ●もう支えられて支えられてって感じですね。大学時代もでも，その Z 先生を初め，いろんな人に支えてもらったと思いますね。
B	●トイレに行かすのと，休み時間の見守りとあって，最初は全部私がしよったんですけど，私の休み時間がなくなるでって言って，いろんな先生が入ってくださることになって。
C	●（いい先輩の先生に出会えて）そこでだいぶ気持ちとしても落ち着けたし，多分成長できたのかなと思って。
D	●ちょっと周りからは結構，「あんた，優しいから，そういうの（福祉職）向いてるのちゃうん？」て，それは前から言ったんですけど，それが結局合った。
E	●自分が（窓口に）出たとしても，バックに専門職おるし，もう 1 人の方女性やし，いかんかったら（ダメだったら）代わったらええなぐらいの気持ちで。（2 年前は）それができんかったのはおっきかったですね。

（）内は著者による解説や補足

また，〔大変な同僚との関係〕について B，C，E から語られたことが興味深い（表 4）。B と C の語りからは，教職という共通点もあり，児童生徒のためには職場での協力体制を構築する必要性があるため，年齢的・キャリア年数的に言いにくい立場でも同僚に指示や提案を行っていることがわかる。一方，E は「普段そんなしゃべらん人」が同じ部署の同僚で，「連携しようにもコミュニケーションが取れへん」ために関係性が築きにくく，何かの際に援助を求めにくかったことに加え，課長が「きつい人」で担当窓口から「下がっとけや言われ」たことなど「もう怖かったです」と入社 2 年目の経験を語ってくれた。この調査で E は，入社から 2 年間は職場で周囲の理解や支援を得られず苦労した経験を率直に語ってくれ，3 年目以降は部署の同僚の配置換えによって新しい同僚との関係性が築けたことを契機に，「自分が（窓口に）出たとしても，バックに専門職おるし，もう 1 人の方女性（3 年目からの同僚）やし，いかんかったら（ダメだったら）

代わったらええなぐらいの気持ちで。」と考えられるようになったという。

表 4　〔大変な同僚との関係〕カテゴリーの語り

	大変な同僚との関係
A	（該当する語りなし）
B	● まあまあ強めの人 2 人に挟まれる立場だって，いい勉強でした，あれは。いい勉強になった，すごい。 ● 50 歳とかの人とかと対等な，立場的には対等じゃないですか。しかもそんな，「これは違いますよ」みたいな感じでは言えんじゃないですか。 ● （同年代なら）「それはおかしいやろ」みたいに言えるけど，そういう言い方じゃなくって，うまく伝えないかんみたいなのがやっぱり人間関係は全然違いますね，学生のときとは。
C	● 頑固でもうちょっと貫き通したらいいのに，何かここら辺ですごい権威のほうにふわっといくんです。そこをそういくのに，こっち来んが（こっちには来ないのか）みたいな感じの，そんな先生と今 3 年一緒にもち上がって。 ● （隣のクラスの先生ともうまいことやっていく努力については）うん，どうにか。人を見ながら，この人はこうやらないかんなというのは。
D	（該当する語りなし）
E	● おまけに物静かな人で，普段そんなしゃべらん人で。だから連携しようにもコミュニケーションが取れへん。 ● （2 年目の課長は）きつい人やった。（Q：はっきり言うてくんの？）A：くるくる。もう怖かったです。 ● こちらは担当になっとるのに下がっとけや言われて，なんぼトップダウンやけん「分かりました」言うて話は聞きよったけど，覚えとけよと思って。

（）内は著者による解説や補足

(4)まとめと今後の課題

本研究では，ピア・リーダーとして養成講座で学習した内容や経験から学んだことを，現在の職業での状況に当てはめ，意義づけている語りが見られた（表 2)。特にアイスブレイクのように，ピア・リーダーとして活動した時の知識やスキルそのものを，現在の職場でも活用しているという語りもいくつかみられたが，リーダーシップという影響力についての考え方を，担任する学級の分析視点として活用し，自らの学級経営に活かしている語りも見られた。また，ピア・リーダー仲間として共に過ごした友人と，現在でも関係を維持していることも明らかとなった。

池田・伏木田・山内（2019）のキャリアレジリエンスの研究では，準正課の活動における「同期からの支援」と「教職員による他律性支援」がキャリアレジリエンスに正の影響を与えていることが指摘されている。本研究での卒業生の語りから得らえた「ピア・リーダーとして活動した時の知識やスキル」は大学教員が行った知識への働きかけ，すなわち「教職員による他律性支援」の一部であり，「ピア・リーダー仲間として共に過ごした友人」は当時の「同期からの支援」だったとすれば，彼らはピア・サポート活動を通してキャリアレジリエンスが育成されていた可能性がある。E が困難な状況に置かれていた際にどのような要因でレジリエントでいられたのかについては深く追究できなかったが，C と年 1 回旅行に行き，毎年のように C の実家へ遊びに行くような職場以外の世界が彼を支えていた可能性は高い。しかし，困難な状況を脱した契機は同僚との関係構築であり，周囲からの支援の重要性を E 自身も認識していることは語りから明らかである。また，調査協力者全員の語りから，周囲の人からの支援を受けているという語りが得られたように，彼らは周囲からの支援がキャリアを形成していく上で重要であることを経験的に学習していた。そのような意味でピア・サポート活動の経験は彼らのキャリア形成を促進していると言えよう。

一方で，本研究での調査協力者の属性の偏りは否めない。また職業の内容によっては，著者の認識の差によって聞き取れる内容の濃淡があることにもこの調査の限界がある。また，本研究はピア・リーダー経験者へのインタビュー調査によって彼らのキャリアについて詳細に聞き取ることが目的であったため，非経験者と比較できず，その差異については明らかではない。本研究をもとに，質問紙調査等を用いて，ピア経験者と非経験者との比較を行うことで，経験者の特徴をより明確にすることが今後の課題である。

＜引用文献＞

新井大祐・小濱歩・中條豊(2017)「『学生の社会性向上』の観点から見る SA による『教員補助』の意義と可能性－國學院大學におけるスチューデント・アシスタント制度の取組から－」,『國學院大學教育開発推進機構紀要』8 号，1-31.

池田めぐみ・伏木田稚子・山内祐平(2019)「大学生の準正課活動への取り組みがキャリアレジリエンスに与える影響－他者からの支援や学生の関与を手掛かりに－」『日本教育工学会論文誌』43(1)，1-11.

宮橋小百合(2014)「ピアリーダー学生の意識を通してみた学習サポート活動の意義」『初年次教育学会誌』6(1)，86-93.

佐藤郁哉(2008)『質的データ分析法：原理・方法・実践』新曜社.

Shook,J.L.& Keup，J.R.(2012)The Benefits of Peer Leadership Programs: An Overview from the Literature，New Directions for Higher Education，No.157，Jossey-Bass，5-16.

杉田真衣(2015)『高卒女性の 12 年－不安定な労働，ゆるやかなつながり』大月書店.

杉谷祐美子(2018)「初年次教育研究の動向と課題－初年次教育学会における研究活動を中心に」初年次教育学会編『進化する初年次教育』世界思想社，8-19.

吉本圭一(2007)「卒業生を通した『教育の成果』の点検・評価方法の研究」『大学評価・学位研究』5 号,77-107.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 中山眞弘、宮橋小百合	４．巻 4
２．論文標題 若手教員育成に向けた校内研修体制の構築	５．発行年 2019年
３．雑誌名 「学校教育実践研究」和歌山大学教職大学院紀要	６．最初と最後の頁 77-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中山眞弘、宮橋小百合、糸賀直人	４．巻 4
２．論文標題 道徳科における「深い学び」を実現するカリキュラムデザイン	５．発行年 2019年
３．雑誌名 「学校教育実践研究」和歌山大学教職大学院紀要	６．最初と最後の頁 21-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森下まちこ、伊澤真佐子、横井志保、宮橋小百合	４．巻 4
２．論文標題 学びを深めるための国語科の学習デザイン：小学校低学年の「説明文」の指導の実際から	５．発行年 2019年
３．雑誌名 「学校教育実践研究」和歌山大学教職大学院紀要	６．最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宮橋小百合	４．巻 3
２．論文標題 初任者研修を核としたPLCの形成が学卒院生の実践力育成に与える影響	５．発行年 2019年
３．雑誌名 和歌山大学教職大学院紀要 ： 学校教育実践研究	６．最初と最後の頁 65-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19002/AA12779311.3.65	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中山眞弘、西浦民子、坂本善行、宮橋小百合	４．巻 3
２．論文標題 小規模校における「対話的で深い学び」の構築に向けた実践と課題	５．発行年 2019年
３．雑誌名 和歌山大学教職大学院紀要 ： 学校教育実践研究	６．最初と最後の頁 55-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19002/AA12779311.3.55	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 宮橋小百合、中山眞弘、須佐宏	４．巻 2
２．論文標題 特別活動における学級会の取り組みの意義と展望～新学習指導要領を見据えて～	５．発行年 2018年
３．雑誌名 和歌山大学教職大学院紀要：学校教育実践研究	６．最初と最後の頁 65頁～73頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中山眞弘、宮橋小百合	４．巻 2
２．論文標題 小学校理科における観察・実験の実際と課題	５．発行年 2018年
３．雑誌名 和歌山大学教職大学院紀要：学校教育実践研究	６．最初と最後の頁 47頁～51頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 坂本善光、中山眞弘、宮橋小百合	４．巻 2
２．論文標題 「考え、議論する道徳」授業の展望	５．発行年 2018年
３．雑誌名 和歌山大学教職大学院紀要：学校教育実践研究	６．最初と最後の頁 59頁～63頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 宮橋小百合、須佐宏、豊田充崇、谷尻治	4．巻 1
2．論文標題 初任者研修プログラムの授業科目のカリキュラム・デザインとその成果	5．発行年 2016年
3．雑誌名 学校教育実践研究、和歌山大学教職大学院紀要	6．最初と最後の頁 15-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 宮橋小百合、中山眞弘、須佐宏	4．巻 1
2．論文標題 初任者研修プログラムにおける訪問指導の実際と課題	5．発行年 2016年
3．雑誌名 学校教育実践研究、和歌山大学教職大学院紀要	6．最初と最後の頁 35-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 宮橋小百合
2．発表標題 初年次教育における学生のピア関係形成・促進のもつ教育的意義②：ピア・リーダー経験のある卒業生へのインタビュー調査から
3．学会等名 初年次教育学会
4．発表年 2019年

1．発表者名 宮橋小百合
2．発表標題 初年次教育における学生のピア関係形成・促進のもつ教育的意義ー地方私立大学における実践事例からー
3．学会等名 初年次教育学会
4．発表年 2018年

１．発表者名 宮橋小百合
２．発表標題 大学教育における学生の共同的な学習の歴史的変遷に関する一考察
３．学会等名 大阪市立大学教育学会
４．発表年 2016年

〔図書〕　計1件

１．著者名 深澤英雄、添田久美子、宮橋小百合、豊田充崇、中山眞弘、須佐宏、谷尻治、衣斐哲臣、岡崎裕、貴志年秀、西浦民子、坂本善光	４．発行年 2018年
２．出版社 小学館	５．総ページ数 192
３．書名 教師になる「教科書」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考